

自然遊学館 だより



二色の浜の貝殻アート

二色の浜では北西風の強く吹く冬場に多くの貝殻が打ち上がります。この冬、貝塚市澤にお住いの丸山幸代さんは足繁く二色の浜に通い、拾い集めた貝殻で作品を作り、当館に寄贈して頂きました。

2021 SPRING

No.99



2021.5.7 発行 貝塚市立自然遊学館

目次

*ネイチャーレポート

- 2021 新春打ち上げ貝採集…………… 児嶋恭平… 1
 二色の浜でのヒメホウキムシの記録
 …………… 山田浩二・久保田 信… 4
 ヨシにつく昆虫 …………… 木村和樹… 5
 ナラ枯れを起こす問題虫 カシノナガキイムシ
 …………… 澤田智子… 6

*行事レポート

- 打ち上げ貝拾い …………… 山田浩二… 7
 千石荘&近木川河口バードウォッチング
 …………… 和田太一… 8

*泉州生きもの情報

- 樫井川上流でアカザ採集 …………… 中島 歩… 11
 二色の浜でのブチヒメヨコバサミの記録
 …………… 山田浩二・柏尾 翔… 12

*館長コーナー

- 自然遊学館からのお知らせなど…………… 高橋寛幸… 12

*調査速報

- 和泉葛城山昆虫調査2020 …………… 岩崎 拓… 14
 貝塚市二色の浜と近木川周辺の鳥調査 20
 …………… 鈴子勝也… 16

- *寄贈標本 …………… 17

- *スタッフ日誌 …………… 19

ネイチャーレポート

2021 新春打ち上げ貝採集

年末から強い北西風が吹いたので家族で打ち上げ貝採集に大阪府生物多様性ホットスポットに指定されている男里川河口左岸海岸（阪南市）と二色浜海岸（貝塚市）に行くことにしました。

2021年1月2日、男里川河口左岸で見つけた二枚貝のうち肉が残っていたものは、ウスハマグリ（図1、環境省レッドデータ2014カテゴリ絶滅危惧Ⅰ類）、オオモモノハナ（図2）、サクラガイ（環境省準絶滅危惧、大阪府レッドリスト2014準絶滅危惧）、ユウシオガイ（環境省準絶滅危惧、大阪府絶滅危惧Ⅱ類）、ムラサキガイ（図3、環境省絶滅危惧Ⅱ類、大阪府絶滅危惧Ⅱ類）幼貝でした。貝に詳しい祖父（兒嶋格）も、男里川河口海岸で肉が残ったウスハマグリは採集したことがないと言っていました。採集したウスハマグリの大きさは、殻長45mm、殻高37mmでした。これらの貝は、干潟との境界にある防波堤の左側（阪南市側）の海岸で採集しました。そのあと、二色浜の近木川河口左岸で父がイヨスダレ（図4）の肉が残ったものを採集しました。

1月4日、男里川河口左岸海岸の採集で見つかった二枚貝の生貝は、オキナガイ（図5）です。肉が残った二枚貝は、ミルクイ（図6、環境省絶滅危惧Ⅱ類、大阪府絶滅危惧Ⅱ類）幼貝、シラトリモドキ（図7、大阪府準絶滅危惧）、イヨスダレ、ウチムラサキ幼貝、タマエガイ、イセシラガイ（環境省絶滅危惧Ⅰ類）幼貝、ツヤガ

ラス？幼貝、ゴイサギ（図8）、オキナガイが見つかりました。肉が残った巻貝は、ハツユキダカラの幼貝が見つかりました。

1月8日、男里川河口左岸海岸の採集で見つかった二枚貝の生貝は、オニアサリ（大阪府準絶滅危惧）です。巻貝の生貝は、ツメタガイ、アカニシ、アラレガイが見つかりました。肉が残った二枚貝は、コベルトフネガイが見つかりました。

1月9日、男里川河口左岸海岸の採集で見つけた二枚貝の生貝は、アサリです。巻貝の生貝は、アカニシを見つけました。肉が残った二枚貝は、イセシラガイ幼貝、シラトリモドキ、イソシジミ幼貝（大阪府情報不足）、ツヤガラス？幼貝、ウチムラサキ幼貝（図9）、ムラサキガイ幼貝、アサリ、サクラガイ、ヒメシラトリ、ユウシオガイが見つかりました。

以上、2021年1月の採集で生息が確認できた貝（肉が残った死殻も含む）は、二枚貝19種類、巻貝4種類でした（表1）。風の強さや吹く方向が影響したのかもしれませんが、打ち上げ貝の種類も量もこれまでより多かったです。特に、サクラガイとユウシオガイがとて多く、肉が残ったものも採集場所に行くたびに10個以上見つかりました。採集はしませんでした。いつもあまり見かけないマガキの生貝も打ち上っていました。それに比べて、ホトトギスの打ち上げは少なかったように思います。男里川河口付近の海には、絶滅の危機にある貝類が生息していることがわかりました。この貴重な海を大切にしていかなければいけないと思いました。

表 1. 男里川河口左岸海岸で採集した貝

生息が確認できた二枚貝	2021年			
	1月2日	1月4日	1月8日	1月9日
イガイ目				
イガイ科				
ツヤガラス? (幼貝)		○		○
タマエガイ		○		
フネガイ目				
フネガイ科				
コベルトフネガイ			○	
マルスダレガイ目				
マルスダレガイ科				
アサリ				○
オニアサリ			○	
ウスハマグリ	○			
ウチムラサキ (幼貝)		○		○
イヨスダレ		○		
ツキガイ科				
イセシラガイ (幼貝)		○		○
バカガイ科				
ミルクイ (幼貝)		○		
ニッコウガイ科				
オオモノハナ	○			
サクラガイ	○			○
シラトリモドキ		○		○
ヒメシラトリ				○
ゴイサギ		○		
ユウシオガイ	○			○
シオサザナミ科				
ムラサキガイ (幼貝)	○			○
イソジミ (幼貝)				○
ウミタケガイモドキ目				
オキナガイ科				
オキナガイ		○		
計 19種				

生息が確認できた巻貝	2021年			
	1月2日	1月4日	1月8日	1月9日
盤足目				
タマガイ科				
ツメタガイ			○	
タカラガイ科				
ハツユキダカラ (幼貝)		○		
新腹足目				
アッキガイ科				
アカニシ			○	○
ムシロガイ科				
アラレガイ			○	
計 4種				

二枚貝死殻	2021年			
	1月2日	1月4日	1月8日	1月9日
二枚貝合殻死殻				
ウグイスガイ目				
ウグイスガイ科				
アコヤガイ			○	
ハボウキガイ科				
タイラギ (幼貝)			○	
フネガイ目				
フネガイ科				
カリガネエガイ				○
マルスダレガイ目				
マルスダレガイ科				
ヒメアサリ				○
チドリマスオ科				
クチバガイ				○
マテガイ科				
エゾマテ			○	
二枚貝破片				
オオノガイ目				
キヌマトイガイ科				
ナミガイ				○
計 7種				

巻貝死殻	2021年			
	1月2日	1月4日	1月8日	1月9日
古腹足目				
ニシキウズガイ科				
アシヤガイ		○		
盤足目				
タマガイ科				
アダムスタマガイ				○
オオネズミガイ		○		○
ソデボラ科				
フドロ (幼貝)		○		
タカラガイ科				
メダカラ		○		○
ハツユキダカラ			○	○
カモンダカラ			○	○
フジツガイ科				
ウネボラ			○	
新腹足目				
マクラガイ科				
マクラガイ		○	○	
計9種				

※ 死んだ貝でも肉がのこっているものは、採集場所で生息していたと考えられます。



図 1. ウスハマグリ
殻長 45 mm、殻高 37 mm
2021. 1. 2 男里川河口左岸海岸



図 2. オオモノハナ
殻長 35 mm、殻高 22 mm
2021. 1. 2 男里川河口左岸海岸



図 3. ムラサキガイ幼貝
殻長 40 mm 殻高 18 mm
2021. 1. 2 男里川河口左岸海岸



図 7. シラトリモドキ
殻長 32 mm、殻高 27 mm
2021. 1. 4 男里川河口左岸海岸



図 4. イヨスダレ
殻長 32 mm、殻高 19 mm
2021. 1. 2 近木川河口左岸



図 8. ゴイサギ
殻長 34mm 殻高 24mm
2021. 1. 4 男里川河口左岸海岸



図 5. オキナガイ
殻長 40 mm、殻高 23 mm
2021. 1. 4 男里川河口左岸海岸



図 9. ウチムラサキ幼貝
殻長 32 mm、殻高 21 mm
2021. 1. 9 男里川河口左岸海岸



図 6. ミルクイ幼貝
殻長 43 mm、殻高 26 mm
2021. 1. 4 男里川河口左岸海岸

参考文献

波部忠重 監修 (1996) 「学研生物図鑑 貝 I 巻貝」
波部忠重・奥谷恭司 監修 (1996) 「学研生物図鑑
貝 II 二枚貝・陸貝・イカ・タコ」
奥谷恭司 (2000) 「日本近海産貝類図鑑」、東海大
学出版会。

謝辞

採集に同行して頂いた家族、貝の種名を確認して
頂いた祖父にお礼申し上げます。

(泉佐野市立佐野中学校 1年 児嶋 恭平)

二色の浜でのヒメホウキムシの記録

ヒメホウキムシ *Phoronis ijimai* は筈虫動物門に属する触手冠^{かん}を持った小型のながむし状の動物で、自らが分泌したキチン質の棲管^{ぼてい}中に住みます。棲管は細長く、途中でいく度となく屈折し、分岐します。虫体は体長 5~7 cm で、前端に長さ 3 mm の触手が約 200 本あり、触手の配列は馬蹄形です。本種は北海道から本州にかけての浅海の砂泥底や、岸壁、貝殻上などに群生することが知られています（内田、2000）。一見するとゴカイ類のようですが、人目にほとんど触れない仲間です。なお、ホウキムシという名は、触手冠が筈のように見えることに由来します。

2018 年 4 月 21 日、二色の浜の地先にある離岸堤の外海に面した壁面から本種を初めて見つけ、2019 年 5 月 6 日には離岸堤岸側の壁面の所どころに群生しているのを確認しました（図 1）。壁面にはイソカイメン類が付着し、それにヒメホウキムシは棲管を埋込させていることが多く、最大で 30 cm 程、少なくとも 5cm×10 cm 程の大きさの群体でした（図 2）。



図 1. ヒメホウキムシの群生
二色の浜離岸堤、2019 年 5 月 6 日

2019 年 5 月 22 日には波間に揺られるヒメホウキムシの動画を撮影し、その自然の織り成すレースのカーテンのような美しさに見惚れてしまいました。開いた触手冠で海水中の微小なプランクトンなどを捕えて餌にするようです（図 3）。



図 2. イソカイメン類に埋込する
ヒメホウキムシの棲管



図 3. 触手冠を開いたヒメホウキムシ

ヒメホウキムシ群体の一部を採集し、液浸標本として自然遊学館および和歌山県有田郡湯浅町にあるベニクラゲ再生生物学体験研究所で収蔵、保管しました。

2020 年の夏季にも離岸堤の岸側で、過去 2 年間と同様の群生を確認していますので、

今後も本種の生息がどのように見られ続けるのか注目していきたいと思います。

引用文献

内田紘臣 (2000) 箒虫動物門 in 財団法人千葉県史料研究財団 (編) 「千葉県の自然史 本編 7 千葉県の動物 2-海の動物-」、p. 199、千葉県。

(山田 浩二、久保田 信 (ベニクラゲ再生生物学体験研究所所長))

ヨシにつく昆虫

2020年12月5日、近木川河口にある汽水ワンド内のヨシ原の生育面積の調査をしていた際に、ヨシの茎と葉の間に密集するモモコフキアブラムシ *Hyalopterus pruni* (Geoffroy) を見つけました(図1)。そのまわりをもう少し観察していると小型の膜翅目(ハチ目)昆虫が見られたので、アブラムシがいるヨシと一緒にプラスチック容器に入れて自然遊学館に持ち帰りました(図2)。

期待通り、同年12月11日、持ち帰った容器の中にモモコフキアブラムシの寄生蜂と思われる小型の膜翅目昆虫を2種類確認しました。それらは、アブラムシに寄生する小型のコマユバチ科アブラバチ亜科の *Aphidius* 属の一種、そしてその寄生蜂の高次寄生者であるオオモンクロバチ科の *Dendrocerus* 属の一種です。図1の写真は、この *Aphidius* 属の一種に寄生されてマミーとなったモモコフキアブラムシです。

一般にはアブラムシの天敵としては、ア

ブラムシを捕食するテントウムシが広く知られていますが、今回確認された寄生蜂のように産卵場所兼生まれた幼虫の成長の場としてアブラムシを利用する天敵も存在します。アブラムシとテントウムシといえば、アリがテントウムシからアブラムシを守る代わりにアブラムシから蜜をもらう話を聞いたことがある人もいると思います。よく観察するとアリが寄生蜂からアブラムシを守る行動も見ることができるともかもしれません。

また、アブラムシの中には産卵するための植物(一次寄主)と単為生殖で増えるための植物(二次寄主)が異なる種がいます。

今回見つかったモモコフキアブラムシも寄主転換する種であり、まずモモやウメなどに産卵し、そこで冬を越します。春に孵化したモモコフキアブラムシは一次寄主の葉を餌にして増えて、寄主である植物の生長を阻害するので、モモやウメの害虫として知られています。次に一次寄主で増えたモモコフキアブラムシは夏頃に有翅虫が現れ、二次寄主であるアシやヨシに移動して単為生殖を繰り返して増殖します。その後、晩秋になると再び有翅虫が一次寄主であるモモなどにもどり、交尾後に越冬卵を産むという生態をもっています。

最後に、今回見つかったモモコフキアブラムシと寄生蜂2種はともに汽水ワンド内では初確認された種であり、寄生蜂2種は貝塚市内で初記録であることがわかりました。

※ 以上、博物館学芸員実習の中で観察したことを報告しました。



図1. モモコフキアブラムシのマミー



図2. 寄生蜂 *Aphidius* 属の一種

参考文献

松本嘉幸 (2008) 「アブラムシ入門図鑑」、全国農村教育協会、239pp.
平嶋義宏・森本桂 (2008) 「新訂原色昆虫大圖鑑第Ⅲ巻」、北隆館、844pp.

(高知大学大学院 総合人間自然科学
研究科1年 木村 和樹)

ナラ枯れを起こす問題虫
カシノナガキクイムシ

「ナラ枯れ (正式名称: ブナ科樹木萎凋病)」という言葉をご存じでしょうか。ブナ科植物のミズナラ・コナラ・カシ類など

落葉性広葉樹が広範囲にわたって枯れてしまう現象をいいます。林野庁によると2010年の被害が最も多く全国で32.5万㎡(被害材積)となり、2019年では6.0万㎡でした。原因としてコウチュウ目の昆虫カシノナガキクイムシ(以下、カシナガ)による被害が大きいといわれています。

ここ数年、貝塚市名越にあるせんごくの杜においてもカシナガによるものと思われる孔があいたナラ類が多数見つかり、そのうち多くの樹木が枯れてしまいました。2020年11月にその孔に潜む本種を採集し、カシナガの被害であることを特定しました。

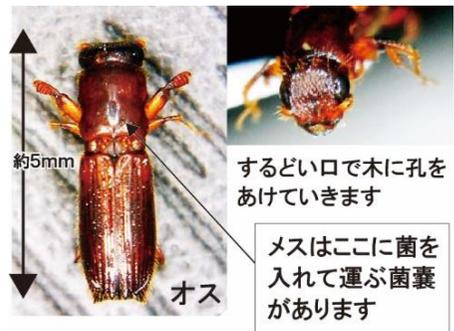


図1. カシノナガキクイムシ

どうやって木を枯らす?

カシナガがナラ枯れを引き起こすメカニズムについては以下のとおりです。

- ①カシナガのオスが木に小さな孔をあけて巣を作る(幹が太く育った大樹がお好み)
- ②そのオスが集合フェロモンを放出して他の仲間を呼び寄せ、集まったオスたちも同じ木に孔をあける
- ③同じく集合フェロモンで集まったメスは幼虫のエサになる菌類を一緒に運んでくる(メスの体には菌を蓄える部分がある)

④ナラ枯れを引き起こす病原菌「ナラ菌」もメスと一緒に運ばれ、木の道管内に菌糸をのばす

⑤水の吸い上げる機能を阻害された木が枯れる

つまり、木を枯らす直接的な原因はナラ菌であり、カシナガが親心でもってくる幼虫のためのエサなのです。元々弱っている木は②の時点で枯れてしまうこともあります。さらに、生まれた幼虫たちが孔を掘りすすめてしまうので、それが原因となって枯れる場合もあるようです。



図2. アラカシの被害
(写真の見える範囲だけで19箇所の孔がある)

しかし、カシナガに孔をあけられたナラ類がすべて枯れてしまうわけではありません。もちろん加害された樹木も樹液を出すなどして抵抗します。カシナガが勝つか樹木が勝つかは、木の健康状態や孔の数、樹種によっても勝率が変わるようです。



図3. カシノナガキクイムシの穿孔から出た樹液

近年なぜ被害が増えた？

カシナガは昔から私たちの周りにいた在来種です。では、なぜ近年になって大量のナラ枯れを引き起こすようになったのでしょうか。

考えられる原因は、①里山の管理がされずにナラ類の木々がカシナガの好む幹の太さまで成長したため？、②ナラ菌が実は外来種？、③温暖化の影響で南方系のカシナガが北上？、などいろいろな説がありますが、①が有力だといわれています。

(澤田 智子)

行事レポート

打ち上げ貝拾い

日時：2021年1月23日(土)13:00～15:30

場所：自然遊学館 多目的室

参加者：19人(うちスタッフ6人)

協力：NPO 法人大阪府海域美化安全協会

朝からあいにくの雨となり、例年は近木

川河口右岸の浜に降りて貝殻拾いを行うのですが、現地に行くのはあきらめ、室内での貝殻標本飾りの製作のみ行いました。

貝殻はあらかじめ二色の浜で拾っていたもの約 20 種を使用しました。貝について、講師の児嶋 格さんから説明を聞いた後、参加者のお気に入りの貝殻を選んで紙皿に貼っていき、その貝の種名ラベルを付けていく作業です（図 1）。

今回は室内作業のみでしたので、比較的時間にゆとりをもつことができましたので、貝殻の種類によって異なる形や触ってみての質感を味わいながら、じっくりと貝殻と向き合うことができました。完成した作品（図 2）は各自お持ち帰り頂きました。



図 1. 貝についての解説



図 2. 参加者の作った貝殻標本飾り

千石荘 & 近木川河口 バードウォッチング

日付：2021年2月20日（土）

場所：千石荘（10:00～11:30）

近木川河口（13:30～15:00）

参加者：千石荘 26 人・近木川河口 27 人
（うちスタッフ 8 人）

毎年、2月の恒例行事となっているバードウォッチングを、昨年と同じく、新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策に注意しながら開催しました。

午前中は千石荘で里地・里山の野鳥を観察しました。集合場所のこすもすの里バス停付近は千石荘病院等跡地の再活用のための大規模な工事が行われており、昨年までと環境ががらりと変わっていました。

双眼鏡の使い方を練習した後、千石城跡の林の中では、メジロやカラ類の混群、シロハラやルリビタキなどが見られました。参加者の皆さんは枝葉の間を動き回る小さな姿を双眼鏡で懸命に追いかけて観察していました（図 1）。



図 1. 千石荘での観察
（双眼鏡の使い方を練習しているところ）

（山田 浩二）

林を抜けてため池をチェックしていくとカイツブリ、マガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロなどが観察されました(図2)。



図2. ハシビロガモ

カンコ池で手前のヨシの茂みから小型のサギが飛び出したので確認するとアカガシラサギの冬羽でした(図3)。アカガシラサギは大阪府では希に見られる珍しい野鳥ですが、昨年度のバードウォッチング行事の後にも千石荘周辺で観察されていたようで、同一個体かはわかりませんが2年連続での記録になります。ホシゴイともよばれるゴイサギの幼鳥に一見似ていますが(図4)、アカガシラサギは翼が白いが目立ちます。



図3. アカガシラサギ

開けた農地へ出ると、上空にノスリが2羽飛び出し、円を描くようにゆったりと青空を舞う姿を全員でじっくり観察しました。



図4. ゴイサギの幼鳥

午前中の千石荘は工事による環境変化が気がかかりますが、鳴き声のみの確認も含めて34種の鳥が観察されました。

午後からは近木川河口で水辺の鳥を中心に観察しました。自然遊学館を出発し、近木川の河口から汽水ワンド(干潟再生地)の方へ歩いていくと、汽水ワンド北側の斜面でキジバトやビンズイ、シロハラやツグミなどが地面に降りて採餌しているのが観察できました(図5、6)。



図5. 近木川河口周辺での観察(ツグミを観察しているところ)



図 6. ツグミ



図 7. セグロカモメ

汽水ワンドから上流を見ると、川へ張り出した木の枝にカワセミがとまっているのを見つけました。カワセミは何度も川にダイビングし、ハゼの仲間のチチブと思われる小魚を捕まえ、頭から丸飲みして食べる様子を観察できました。

汽水域ではジョウビタキのオスやイソシギ、ヨシ原にはメジロ、シジュウカラ、ウグイスが確認できました。

左岸の河口に出ると砂嘴でカワウやカモの群れが休んでおり、その中にはスズガモやウミアイサ、セグロカモメがクロダイと思われる大きな魚を食べているのが観察されました(図7)。カモの仲間とくに数が多かったのはヒドリガモでしたが、その中に1羽、部分白化で頭部後方の羽根が白く色が抜けた個体がありました(図8)。この部分白化のヒドリガモは今年の冬も観察しており、近木川河口に毎年飛来しているようです。



図 8. ヒドリガモの部分白化個体

午後の近木川河口では 36 種の鳥が観察されました。ポカポカ陽気の中で、カワセミや河口のカモ類などたくさんの種類の野鳥を見る事ができました。

以下の表に、千石荘と近木川河口において確認できた鳥類のリストを示しました。

バードウォッチング行事において観察された鳥類			2021年2月20日		
			千石荘	近木川河口	
カモ目	カモ科	オカヨシガモ		○	
		ヒドリガモ		○	
		マガモ	○		
		カルガモ	○	○	
		ハシビロガモ	○		
		キンクロハジロ	○		
		スズガモ		○	
		ウミアイサ		○	
カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	○	○	
ハト目	ハト科	キジハト	○	○	
		ドバト		○	
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	
ペリカン目	サギ科	ゴイサギ	○		
		アカガシラサギ	○		
		アオサギ	○	○	
		ダイサギ	○	○	
		コサギ	○	○	
ツル目	クイナ科	オオバン	○	○	
チドリ目	チドリ科	ケリ	○	○	
		シギ科		○	
		イソシギ		○	
		カモメ科	ウミネコ		○
		セグロカモメ		○	
タカ目	ミサゴ科	ミサゴ		○	
		タカ科	トビ	○	○
			ノスリ	○	
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ		○	
キツツキ目	キツツキ科	コゲラ		鳴	
スズメ目	モズ科	モズ	○	○	
		カラス科	ハシボソガラス	○	○
			ハシボトガラス	○	
	シジュウカラ科	ヤマガラ	○		
		シジュウカラ	○	○	
		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○
	ウグイス科	ウグイス	○	○	
	エナガ科	エナガ	○		
	メジロ科	メジロ	○	○	
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	
	ヒタキ科	シロハラ	○	○	
		ツグミ	○	○	
		ルリビタキ	○		
		ジョウビタキ		○	
		イソヒヨドリ		○	
		スズメ科	スズメ	○	○
	セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	
		ピンズイ		○	
	アトリ科	カワラヒワ	○	○	
	ホオジロ科	アオジ	○	○	
種数			34	36	

「○」印は目視による確認、「鳴」は鳴き声のみによる確認であることを示しています。

(NPO 法人南港ウェットランドグループ
和田 太一)

泉州生きもの情報

樫井川上流でアカザ採集

2021年3月23日、樫井川上流（泉佐野市）にて流れが緩やかな場所の川底に溜まっている落ち葉をタモ網で掬うと、体長約

3.5 cmと4 cmのアカザの幼魚が2匹採集されました（図1）。アカザは小型のナマズの仲間です。最大で約10 cmまで成長する淡水魚です。また、背びれと胸びれに毒針を持ち、素手で触る際には注意が必要です。大阪府レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されている希少な淡水魚です。

近年、大阪府では河川改修や川沿いで行われた工事による土砂流出等により生息数が減少し、現在ほとんどの川で姿を消しているようです。しかし今回採集した樫井川を含め、泉州地域の一部の自然が残された河川では、数は少ないもののアカザは今でも生息し続けているようです（2001年；近木川水系 梶谷川（山田、2003）、2010年；男里川水系（花崎・三宅、2013））。これからもアカザが生息できるような自然豊かな環境が守られていくことを願います。



図1. アカザ
(樫井川上流、2021. 3. 23)

引用文献

- 山田浩二（2003） 梶谷川にてアカザが見つかる。貝塚の自然、5：87。
- 花崎勝司・三宅壽一（2013） 大阪府泉州地域における河川魚類 追補。南紀生物、55（1）：59-62。

（開智高等学校1年 中島 歩）

二色の浜での ブチヒメヨコバサミの記録

ブチヒメヨコバサミ *Areopaguristes japonicus* はヤドカリ科ブチヒメヨコバサミ属の一種で、房総半島、福井県から九州の両沿岸、伊豆大島に分布し（有馬、2014）、潮間帯よりやや深い浅海に多く生息していることが知られています（北嶋ほか、2014）。はさみ脚及び歩脚は柔らかな毛が生え、地の色は淡い茶色で各節に茶色の横縞があります。第1触角は青白く、先端が黄色味がかかり、第2触角は羽毛状です。眼柄は青味がかかります。

2019年6月14日及び、2020年10月28日に二色の浜の突堤横の潮下帯をスクューバダイビングによる潜水での観察を行った際、水深2~3mの海底の礫をめくると複数個体のブチヒメヨコバサミを見つけ、採集しました（図1）。本種の記録は貝塚市の海岸では初めてとなるものです。10月28日に採集したものの中には抱卵個体も混ざっていました（図2）。また、同所的にはケブカヒメヨコバサミ *Paguristes ortmanni* も生息していました。

近隣では和歌山市加太海岸でのブチヒメヨコバサミの記録があり、そこでの生息状況は潮下帯域における優占種であり、転石下の砂礫底から多数見出されています（柏尾ほか、2018）。

これまで貝塚市の海岸で記録されたヤドカリはヤドカリ科4種、ホンヤドカリ科4種の計8種でしたが（山田・和田、2018など）、本種が加わり9種となりました（表1）。



図1. ブチヒメヨコバサミ
（二色の浜、2020. 10. 28）



図2. ブチヒメヨコバサミの抱卵個体
（二色の浜、2020. 10. 28）

表1. 貝塚市の海岸でこれまでに記録されたヤドカリ

ヤドカリ科	コブヨコバサミ
	ケブカヒメヨコバサミ
	ブチヒメヨコバサミ
	イザナミツノヤドカリ
ホンヤドカリ科	テナガツノヤドカリ
	ホンヤドカリ
	ケアシホンヤドカリ
	ユビナガホンヤドカリ
	ヨモギホンヤドカリ

引用文献

- 有馬啓人 (2014) 「ネイチャーウォッチングガイド ヤドカリ」 誠文堂新光社, 5 : 87.
- 柏尾 翔・岸和田市立光洋中学校科学部・山田浩二 (2018) 和歌山市加太海岸のヤドカリ相一初記録 8種の報告一. Melange, 17 (2) : 1-4.
- 北嶋 円・伊藤寿茂・岩崎猛朗・富永早希・佐野真

奈美・植田育男・村石健一・萩原清司（2014）
江の島の潮間帯ヤドカリ類相．神奈川自然誌資
料，35：17-24．

山田浩二・和田太一（2018）二色の浜のアマモ場
の生物調査（2015年）．貝塚の自然，19：35-38．

（山田 浩二、柏尾 翔（きしわだ自然資料館））

館長コーナー

自然遊学館からのお知らせなど

新しい気持ちで迎えた新年度ですが、4
月に入り、緊急事態宣言が発出され、遂に
当館も4月25日から5月11日まで臨時休
館になりました（図1、図2）。



図1. 館の南側壁の臨時休館のお知らせ



図2. 玄関の臨時休館のお知らせ

前号で、館内感染予防協力のお願いと令
和2年度の館の情報として行事实施数や見
学者数の現状を以下のようにお知らせし
ました。

出前講座・団体見学・入館者数の比較

- ・出前講座数はほぼ半分に。
- ・団体見学の団体数はほぼ1割に。
- ・入館者数は約6割に減少しました。

1年を通し当館の利用活用数は大きく減
少したようです。

（令和元年から2年の年中統計の比較より）

今年度はどうなることでしょうか。

昨年同様、今年度も団体見学は受け入れ
ていません。さらに、緊急事態宣言発出の
影響で、新年度の行事や観察調査活動の実
施がいくつか見送られたり、中止になり
たりしています。

例えば、4月から開始予定の近木川のア
ユ調査は1回目と2回目が中止になりまし
た。また、春の行事の一つ、二色の浜での
稚魚放流とごみ拾いも中止になりました。

昨年を振り返ると同じことの繰り返し
になっていきそうです。

今後も室内での密になる行事や講座は
行えない可能性があります。唯一、屋外で
の少人数での行事の実施は可能ではない
かと考えていますが、どうなることか予想
が付きません。

手や指の消毒、手洗い、うがい等身近な
予防とワクチン接種に期待をするしか
ないと考えるとなかなか先が見えないとい
うのが正直なところでしょうか。

そんな中、館内の展示を一つ更新しまし
た。以前から分かりにくいという声が聞こ

えていた近木川の石の展示コーナーを少し模様替えしました。



図 3. 更新前の石の展示コーナー

上の写真のように幾種類もの石が雑然と置かれていました（図 3）。

石を取り出し、溜まったごみやほこりを取り除き、再度石を置きました。

今回、以前と置き方を変えたところは、近木川の上流部から中流部・河口付近までのいくつかのポイントで採集された石を大きく火成岩と堆積岩の 2 種類に分け、それぞれに区別して並べてみました。いろいろな石が混ざっているため意識的に区別して置いた方が分かりやすいのではないかと考えたからです（図 4）。

並べ終えたあと、「すっきりしてきれいになった」との声が聴かれました。



図 4. 仕切りを作り並べ替えた後の様子

近木川は和泉山脈から大阪湾までを流れる川として知られ、この間にいくつかの特徴のある地層や岩体の箇所を流れています。このことが河原の石に表れていたのです。

今回は石の並べ替えとともに、少しだけ大阪の地層の地図や石の説明の掲示物を付け加えました。とくに小学校 4 年生から中学生までの方々に見てもらうことを想定しました。

一つ一つの石の名前は示していませんが、石の大きさや形、色の変化などの特徴が見て分かるように更新したつもりです。ぜひご覧いただき感想をお寄せください。

（高橋 寛幸）

調査速報

和泉葛城山昆虫調査 2020

2020 年も和泉葛城山の山頂付近（標高約 800～858m）において 4 月から 12 月までの各月に 1 回、ルートを決めて 3 時間程度の昆虫調査を行いました。

1. 大阪府レッドリスト種

絶滅危惧Ⅱ類のナキイナゴは 13 年連続で確認されています。準絶滅危惧では、ミヤマアカネ（図 1）、ハルゼミ、エゾゼミ、セダカテントウダマシ、情報不足として、クロマルハナバチを確認しました。

意外な結果は、2009 年から 2019 年まで 11 年連続で確認されていたヒトコブササキリモドキを全く見なかったことです。昨

年までは、複数回の調査で、それぞれ複数個体を確認することも稀ではなく、安定的に個体群が維持されていると考えていました。



図1. ミヤマアカネ
(トンボ目トンボ科、2020. 8. 7)

2. 注目種

貝塚市内での確認例が山頂付近に多い種や、2014年の大阪府レッドリストでランク外とされた種などを中心にリストアップしています。

ヒメヤママユは2011年に幼虫、2018年に1枚の翅で確認され、今回は若齢幼虫での確認でした(図2)。昨年の速報でも書きましたが、ガ類に関しては、昼間の調査ではまぐレ的な要素が多いのだと思います。

調査開始の2008年から2014年まで確認されなかったジャコウアゲハは、2015年から6年連続での確認となりました。

最も未確認の期間が長いのはヨツボシカメムシで、2010年が最後の確認となっています。

これまで何回か見ているはずと勘違いしていたのは、アカスジキンカメムシで、2008年の定期調査開始以来、初めての確認でした。自然遊学館の標本記録も、2004年

の蕎原産以来、途切れていたもので、注目種に加えました。



図2. ヒメヤママユの幼虫
(チョウ目ヤママユガ科、2020. 5. 14)

3. その他

アシグロツユムシは、山頂では普通種でしたが、2020年は全く確認されませんでした。アオマツムシは2010年に鳴き声を聞いた時は、耳を疑いましたが、2017年から4年連続で確認され、定着したものと思われます。先に書いたヒトコブササキリモドキのことと合わせて考えると、山頂付近の林内と林縁で、何か環境の変化が起こっているのかもしれませんが。

チョウ類は27種を確認しました。9回の調査の種数としては平均的な値ですが、ヒョウモンチョウの仲間は確実に減っています。増えているものとしてはテングチョウがあげられ、6月4日には、300個体以上の群飛を見ました。

クルミヒロズヨコバイ(図3)など、これまで自然遊学館に標本がなかった種、および紹介した大阪府レッドリスト種、注目種の確認日(2020年の月/日)を示しました。日付の後の「*」印は幼虫での確認を示し、無印は成虫での確認です。



図3. クルミヒロズヨコバイ
(カメムシ目ヨコバイ科、2020. 7. 16)

大阪府レッドリスト種

絶滅危惧Ⅱ類

ナキイナゴ 6/4、7/16、8/7

準絶滅危惧

ミヤマアカネ 8/7

ハルゼミ 6/6

エゾゼミ 7/16、8/7、9/15

セダカテントウダマシ 7/16

情報不足

クロマルハナバチ 10/6

注目種

オニヤンマ 8/7

ホソクビツユムシ 7/16、9/15

アカスジキンカメムシ 10/6*

トゲカメムシ 7/16、8/7、9/15

トホシカメムシ 7/16、11/6

センチコガネ 5/14、8/7

ジャコウアゲハ 6/4、9/15

ヒオドシチョウ 4/16

アサギマダラ 6/4、9/15

ヒメヤママユ 5/14*

標本がなかった種

ニセアシブトケバエ 4/16

クルミヒロズヨコバイ 7/16

ムモンオオハナノミ 10/6

謝辞

コウチュウ目の初標本種を同定していただいた
澤田義弘氏に謝意を表します。

引用・参考文献

『大阪府レッドリスト2014』（大阪府、2014）

(CB 大阪 岩崎 拓)

貝塚市二色の浜と
近木川周辺の鳥調査 20

市民の森～二色の浜を調査していると
スズメの群れがよく見られるようになりました（図1）。

二色の浜公園周辺において2021年1月～3月に観察された鳥類					
目	科	種	1月	2月	3月
			22日	26日	19日
カモ目	カモ科	オカヨシガモ	○		○
		ヒドリガモ	○	○	○
		カルガモ	○	○	○
		オナガガモ	○		○
		コガモ	○		○
		ホシハジロ	○	○	
		スズガモ	○	○	○
		カイツブリ	○	○	
カイツブリ目	カイツブリ科	カンムリカイツブリ	○		○
ハト目	ハト科	キジハト	○	○	○
		ドバト	○	○	○
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○
ペリカン目	サギ科	アオサギ	○		○
		ダイサギ			○
		コサギ			○
ツル目	クイナ科	オオバン	○	○	○
チドリ目	チドリ科	シロチドリ	○	○	○
	シギ科	イソシギ		○	
		ハマシギ	○	○	
	カモメ科	カモメ			○
		セグロカモメ	○	○	
タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	○	○	○
	タカ科	トビ			○
スズメ目	モズ科	モズ	○		○
	カラス科	ハシボソガラス	○	○	○
		ハシブトガラス		○	
	シジュウカラ科	シジュウカラ			○
	ヒバリ科	ヒバリ			○
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○
	メジロ科	メジロ	○		○
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○
	ヒタキ科	シロハラ	○	○	
		ツグミ	○	○	○
ジョウビタキ			○	○	
イソヒヨドリ		○	○	○	
スズメ科		スズメ	○	○	○
セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○	
	ビンズイ		○		
ホオジロ科	アオジ	○	○		
	種数	29	26	30	



図1. スズメ
(市民の森 2021年3月19日)



図2. オオジュリン
(近木川河口 2021年3月5日)

(鈴子 勝也)

近木川河口にヨシ原があり、その中に小鳥がエサを食べにやってきます。メジロやオオジュリンなどが確認することができます(図2)。

 寄贈標本

<植物>

◆佐藤正明さんより

ヤナギモ

貝塚市麻生中 2021年1月30日採集

ヤナギモ

貝塚市麻生中 2021年2月13日採集

<鳥類>

◆青木邦男さんより

メジロ 死体1点

貝塚市澤 2021年2月3日採集

<魚類>

◆丸山幸代さんより

ヒフキヨウジ 死体1点

貝塚市二色の浜 2021年1月17日打上げ



ヒフキヨウジ

当館の記録では貝塚市の海岸で初めてになります。

近木川河口周辺において2021年1月~3月に観察された鳥類				1月	2月	3月		
目	科	種	8日	5日	5日			
カモ目	カモ科	オカヨシガモ				○		
		ヒドリガモ	○	○	○			
		マガモ	○					
		カルガモ	○	○	○			
		オナガガモ	○	○				
		コガモ	○	○	○			
		ホシハジロ	○	○				
		スズガモ	○	○	○			
		カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	○			
		ハト目	ハト科	キジバト	○	○	○	
ドバト	○			○	○			
カツオドリ目	ウ科	カワウ	○	○	○			
ペリカン目	サギ科	アオサギ	○	○	○			
		ダイサギ	○					
		コサギ	○					
ツル目	クイナ科	オオバン	○	○	○			
チドリ目	チドリ科	ケリ	○					
		イカルチドリ		○				
	シギ科	イソシギ	○	○	○			
	カモメ科	ウミネコ	○					
		セグロカモメ	○					
タカ目	ミサゴ科	ミサゴ				○		
	タカ科	トビ		○				
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	○	○				
スズメ目	モズ科	モズ	○	○	○			
	カラス科	ハシボソガラス	○	○	○			
		ハシブトガラス			○			
	シジュウカラ科	シジュウカラ	○		○			
	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○			
	メジロ科	メジロ	○	○	○			
	ムクドリ科	ムクドリ	○	○	○			
	ヒタキ科	シロハラ		○				
		ツグミ	○	○	○			
		ジョウビタキ	○	○	○			
			イソヒヨドリ		○			
	スズメ科	スズメ	○	○	○			
	セキレイ科	ハクセキレイ	○	○	○			
		ピンズイ		○	○			
	アトリ科	カワラヒワ			○			
	ホオジロ科	アオジ	○					
		オオジュリン			○			
		種数	31	27	29			

◆河野通浩さんより

ビワヒガイ 生体 1点

ウツセミカジカ 生体 2点

滋賀県琵琶湖 2021年2月6日採集



ビワヒガイ

◆中島 歩さんより

アカザ 生体 1点

泉佐野市樫井川 2021年3月23日採集

<軟体動物>

◆丸山幸代さんより

アケボノキヌタ 生体 1点+殻 1点

ヒメシラトリ 殻 11点

マテガイ 殻 4点 ほか

貝塚市二色の浜 2021年1月4日打上げ

ムラサキガイ 殻 1点

ミドリイガイ 殻 1点

マテガイ 殻 1点

ヒメシラトリ 殻 4点 ほか

貝塚市二色の浜 2021年1月6日打上げ

ハボウキガイ 殻 1点

エマイボタン 殻 1点 (軟体有)

アケボノキヌタ 殻 1点 (軟体有)

オオネズミガイ 殻 3点 ほか

貝塚市二色の浜 2021年1月9日打上げ

アケボノキヌタ 殻 1点 (軟体有)

ムラサキガイ 殻 1点

貝塚市二色の浜 2021年1月13日打上げ

ムラサキガイ 生体 2点

貝塚市二色の浜 2021年1月15日打上げ



ムラサキガイ

アケボノキヌタ 殻 1点 (軟体有)

ムラサキガイ 生体 1点

ネコガイ 死体 3点

オオネズミガイ 死体 4点

ミミズガイ 死体 1点

貝塚市二色の浜 2021年1月17日打上げ

◆高田雅彦さんより

メダカラ 殻 1点

貝塚市二色の浜 2021年1月10日打上げ

◆中新遥希さんより

オネダカサルアワビ 殻 1点

貝塚市二色の浜 2021年3月20日打上げ

◆大橋良子さんより

ナミコギセル 生体 15点

貝塚市千石荘 2021年3月26日採集

<節足動物>

◆丸山幸代さんより

フトミゾエビ 生体 1点

イボイチョウガニ 死体 1点

イッカクガニ 死体 1点

キンセンガニ 生体 2点

スネナガイソガニ 生体 1点 など

貝塚市二色の浜 2021年1月10日打上げ

<昆虫>

◆得津貴大さんより

クビキリギス（紅色型） 成虫 1点
貝塚市加治 2021年3月26日採集

<寄贈写真>

◆秋武仁志さんより

ナニワトンボ 成虫 1点
タイリクアカネ 成虫 1点
熊取町和田山 2020年11月15日撮影
カワアイサ 1点
岸和田市蜻蛉池公園
2020年12月23日撮影
トモエガモ 1点
岸和田市蜻蛉池公園
2020年12月24日撮影
クロツラヘラサギ 1点
岸和田市久米田池
2020年12月25日撮影
ウミアイサ 1点
近木川河口 2021年2月12日撮影

<目撃情報>

◆常道武士さんより

ノウサギ 1個体
貝塚市橋本 2021年2月8日目撃

スタッフ日誌

1月18日、第19回「私の水辺」泉南地域交流会として、水辺活動の啓発展示会が当館の多目的室で始まり、1月29日まで開催されました（大阪府岸和田土木事務所主催）。地域の自然を見守る各市民団体が、工夫をこらして自分たちの活動の様子をポスターで紹介されていました。（高）

2月17日、自然遊学館ホームページのバリアフリー化のため、すべての画像の代替テキストを修正する作業を終えました。貝塚の自然のページは、エリア別と分類別のサブページに分かれていて、それぞれに多くの生きものの画像が掲載されています。総枚数を正確には把握していませんが、おそらく1,500枚以上あると思います。代替テキストでは、被写体の状態を説明することに加えて、それぞれの生きもの大きさや形、生活の仕方などの特徴も、大まかではありますが、紹介しています。音声読み上げソフト等を使用して、お聞きいただけると幸いです。（岩）

3月10日、貝塚市立津田小学校6年生の皆さんと二色の浜でビーチコーミング（漂着物拾い集め）を行いました。この日に先立ち、2月19日に学校の教室で市内の環境と生きものについて、当館から2名出向いて事前学習を行っていました。卒業間近の子供達はワイワイ言いながらも、砂浜で眼を皿のようにして貝殻やマイクロプラスチックなどを拾い集めました。（山・澤）

自然遊学館だより 2021 春号 (No. 99)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

ホームページ

<https://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

フェイスブック

<https://www.facebook.com/sizenyugakukan>

発行日 2021. 5. 7

この小冊子は庁内印刷で作成しています。